

# 平成25年度事業報告

## 鹿児島国際大学・鹿児島国際大学短期大学部

### 1 教育の力・研究力の向上を目指す事業計画および報告

#### 【学部】

#### (1) 経済学部

①経済・経営に関する授業およびフィールドワーク（国内・海外インターンシップ等）により、地域社会・国際社会に貢献する人材育成を、さらに進める。

##### 1) 国内インターンシップ

種類	参加学生数		経済学部 学生比率
	経済学部	全学	
鹿児島県	21名	28名	75.0%
3日間のカバン持ち	24名	35名	68.6%
独自開拓	20名	30名	66.7%
全体	65名	93名	69.9%

参加学生は65名（全学93名）、全学の約7割を占めた。

参加後、種類毎の体験報告会および授業「地域創生Ⅱ」を利用した報告会、学内報告会を実施した。

##### 2) 海外インターンシップ

インターンシップ先	参加学生数		経済学部 学生比率
	経済学部	全学	
中国・大連	2名（経済3年，地創4年）	9名	22.2%
韓国	2名（経営3年）	4名	50.0%
台湾	参加なし	6名	0
シンガポール <sup>(※)</sup>			
全体	4名	19名	21.1%

参加学生は4名（全学19名）であった。

※「シンガポール」は2014年度より実施予定。

##### 3) フィールドワーク

###### a. がらっばの食べ歩き

ねらい「慈眼寺の個性豊かな飲食店を多くの人に知ってもらう」

第1回目は8名参加，主な活動は，タウン情報マップ作成，参加店舗勧誘，周辺へのチラシ配布，チケット販売，うちわ・タウンマップの配布であった。

また，地元タレントに同行して，店舗案内やイベント取材にも協力した。

第2回目は11名参加，企画・運営（告知・チケット価格見直し・当日の案内・チケット配布）を行った。作成したタウンマップは，大学の広報活動や鹿児島市役所で引き続き利用されている。

**b. おれんじ鉄道乗るなら！？今だせん！肥薩おれんじ鉄道応援！北薩スイーツでおもてなしフェア**

経済学科 3年 25名が、2013年12月21日～23日に実施した。

肥薩おれんじ鉄道沿線地域（薩摩川内，阿久根，長島，出水）の土産品を調査・発掘，商品仕入れ等についての交渉，後援依頼，PR・宣伝活動，地元デパートでの販売，成果報告までを行った。

**c. 白くま・黒豚電車**

経営学科が中心となり，鹿児島市交通局とタイアップし，「鹿児島とあなたと市電プロジェクト」を企画，2013年3月9日から「でんでん」として運行，市民の間で親しまれている。2014年は「でんでん1周年記念イベント」として，貸し切り電車を鹿児島大学附属小学校3年生と鹿児島養護学校小学部の生徒が利用した。同日「白くま黒豚電車でんでんソング」も発表した。本取組みについては，「鹿児島まんがプロジェクト」の協力を得て漫画「でんでんこぼなし」として，市電で配布するなど活動中である。

**②各学年に演習を設置し，4年次の演習を必須化しているが，さらに共通科目にキャリアデザイン科目を配置し，就業力の育成を図っている。**

全学年に履修指定科目として演習を配置した（経営学科地域創生専攻2年前期の「発展演習」を除く）。

年次	前期	後期
1年次	新入生ゼミナールⅠ：2単位	新入生ゼミナールⅡ：2単位
2年次	発展演習：2単位 <sup>(※1)</sup>	基礎演習 <sup>(※2)</sup> ：2単位
3年次	演習Ⅰ：2単位	演習Ⅱ：2単位
4年次	演習Ⅲ：2単位	演習Ⅳ（卒業研究含む）：4単位

※1 発展演習は経営学科地域創生専攻のみで開講している。

※2 学生は基礎演習担当の教員が担当する3・4年次の演習Ⅰ～Ⅳを原則として続けて履修する。

経営学科の「新入生ゼミナールⅡ」では，鹿児島市内の中小企業経営者を招いて「経営者と語る会」を実施した。

また，共通科目にキャリアデザイン科目として「コミュニケーション力育成」，「自己分析と文章力育成」，「論理的思考と数的処理」，「社会人の仕事術」を開講した。

**③公務員・税理士を目指す学生たちと「顧問教員」がグループをつくり，公務員・税理士を目指す課外講座「公務員講座」，「税理士講座」として学生たちが自ら学びあうモデル学習を試験的に始める。**

具体的な実施には至っていない。

**④新入生ゼミ発表会，卒論発表会を始める。**

経済学科では，前期の「新入生ゼミナールⅠ」（2013年5月28日）に「経済クイズ王決定戦」を，後期「演習Ⅱ」（2014年1月14日）に6ゼミ参加の「ゼミ対抗プレゼン大会」を実施した。

経営学科では，前期の「新入生ゼミナールⅠ」（2013年7月11日・18日），後期

「新入生ゼミナールⅡ」(2014年1月16日・23日)に共同発表会を実施した。

地域創生学科では、卒論発表会として、3年生が見学する中、自分の卒業研究について約5分の報告、3分の質疑応答を行った。(発表は他学科学生6名を含む38名)

⑤経済学科では高校への出張講義を着実にを行い、経営学科では学生補助員(SA)の協力をえてキャンパス見学会の「模擬授業」を充実し、学生確保につとめる。

経済学科では、キャンパス見学会の1回目(7月21日)と3回目(10月12日)に「模擬授業」と「学科相談コーナー」を設け、担当教員を配置した。2回目(8月5日)には「学科相談コーナー」のみ実施し、専門コースや資格などの質問を受けた。

また、経済学科教員が高校への「出張講義」を合計16回行なった。鹿児島市内・離島を含む市外の高校で実施し、経済学部のPRにも努めた。

経営学科では、学生補助員(SA)の協力を得て、「模擬授業」を実施した。

⑥地域産業との連携として、「マーケティング」等の専門分野との共同事業を行う。実現に至っていない。

⑦その他

#### 1)キャリアデザイン関連の講演会

経済学部学会委員会主催で、2013年11月23日に、CMで有名な鹿毛康司氏(エステ(株)特命宣伝部長クリエイティブディレクター)による、「伝えるということ」を演題に講演を実施した。200名を超える参加者があった。

#### 2)高大連携事業

経済学部教員と鹿児島商業高校とで高大連携のプロジェクトを立ち上げた。

今後、「フィールドワーク関係」、「国際交流関係」、「情報処理関係」、「教材開発関係」の4分野で進めることになっている。

## (2)福祉社会学部

①現代社会学科の学生が誇りを持って勉学に励み自己実現を図れるよう学科及び学部としてもこまやかな目配りを行った。中でも、「社会調査士」資格取得のためには、フィールド・リサーチを鋭意実施した。平成25年度は3名の教員で担当し、ハローワーク前でのアンケートや谷山地区の地域活動などフィールドワークに具体的に取り組んだ。なお、社会調査士資格については11名の学生が資格申請を行い、11名全員が資格を取得して卒業した。

②児童学科の入学者については、平成25年度も入試判定を厳格に進めた結果、定員の1.07倍で推移した。なお、大学基準協会からの指摘を踏まえ入学定員の1.2倍以内に抑える計画で入試判定に臨んだが、平成26年度入試に関してはセンター試験利用合格者の歩留りが予想以上に高く推移し、結果として総計181名の入学生が入学することになった。27年度入試へ向け、より確実な精査と対応が必要となった。

③社会福祉学科においては、前期は5月25日～6月14日(12コマ：うち1コマはオリエンテーション)、後期は9月24日～12月20日(34コマ)の日程で、「社会福祉士受験対策講座」実施している。5月26日には講座の一環として模擬試験を実施した。

児童学科においては、これまで同様に懇切丁寧な実習事前指導によって実習への

心構え・必要な技能などの育成を確実に行うとともに、実習事後指導において実習後の学びの課題を明確にするように指導している。また、実習中の訪問指導も学科の教員全員で確実にやっている。

④現代社会学科では、地域の人材や全国レベルで活躍中の方々を「現代社会論」や「現代社会特講Ⅱ」の講師として迎え、活気ある講義を毎回のテーマを工夫しながら実施した。「3・11」「現代中国事情」などをテーマに興味深い内容が繰り広げられた。

社会福祉学科では7月6日に「仕事と学生生活のプロデュース方法」というテーマで本学社会福祉学科卒業生の中尾賢一郎氏の公開講演会（本学社会福祉学会主催）を実施した。また、7月20日に県内ソーシャルワーク関係諸団体と本学の共催で第4回ソーシャルワーカーデー・シンポジウム「今、貧困、生活保護を考える」を実施した。

児童学科では、市内小学校における学校支援ボランティアや児童学会の各研究部会による保育所・幼稚園・施設等での様々なボランティア活動が活発に実施された。また、新入生ゼミナールや演習単位での小学校等との連携や児童学科教員の種々の講師招聘が県内幅広く進められた。

### （3）国際文化学部

①国際文化学科は必修の卒業論文作成を最終目標に、計画的なカリキュラムを作り、学生が主体的・個別的な研究課題を追求できるようにする。

全教員の努力により十分な成果があがった。

②国際文化学科は昨年新設したSSD（学科学生スタッフ）を強力に育成し、学生の自主性・創造性を高める。

SSD学生は登録40名、その中で常時活動に参加している学生が15名である。非常に主体的に活動し、新入生歓迎会、キャンパス見学会（3回）、卒業パーティーなどの学科行事を中心になって運営し、学科講演会（県民交流センター）の裏方や学科HPの運営でも活躍してくれた。年度の後半以後、SSD facebookで学科の活動や宣伝をタイムリーに行ってくれた。

③FD意見交換会を活発化して、授業改善を促進する。

充分には履行できなかった。国際文化学科では、新入生ゼミナール担当教員による初年次教育の勉強会を発足させ、情報と方法の共有化に努めた。音楽学科では、外部講師による「吹奏楽指導法講座」を開催し、実技指導法の向上に努めた。

④学部主催の「学内研究会」、紀要「国際文化学部論集」、「教員定期演奏会」の充実につとめる。

「学内研究会」は、11月27日、外山雄大監督（『薩摩剣士隼人』総監督・総合プロデューサー）を講師にお招きし、「物語の地産地消：『薩摩剣士隼人』製作秘話」という題目で行った。若者に名前が知られていることもあって、参会者は60人で、学生も多かった。紀要「国際文化学部論集」の刊行は4回行い、前年より掲載論文数が増えた。「教員定期演奏会」は、かごしま県民大学連携講座として5月10日に開催し、研究成果の地域社会還元を果たすことができた。

⑤広報活動として「出前講義」・こくさいAMUキャンパス@紀伊国屋書店・キャンパス見学会・HPの充実を努める。また、「県民大学講座」連携事業として、国際文化学科は毎月2回の連続講座、音楽学科は「吹奏楽指導法講座(屋比久勲先生)」・「リコーダーフェスティバル」・「マタイ公演」・「吹奏楽演奏会」等を行う。

予定した広報活動は全て行った。「県民大学講座」は月2回のペースで開催し、「国際文化学科」講座として定着した。音楽学科では、「吹奏楽指導法講座」をはじめとして全部で17回の演奏会や公演を開催した。とくに「マタイ公演」は大盛況で、メディア等でも大きく取り上げられた。

## 【大学院】

### (1) 経済学研究科

#### ①地域の経済・経営に貢献するスペシャリストを育成する。

徹底した個別指導をもとに、商社ビジネスマンなどのスペシャリストの他にも課程博士3名を輩出した。

#### ②研究者の養成に加えて税理士など資格取得を目指す教育を行う。

上記課程博士修了生3名の他にも、税理士を希望する学生が数名いたが、修了時までに資格を取ることがかなわなかった。それぞれわずか1科目程度の未修科目を残すのみであったので、終了後も引き続き科目修得に努め資格を取りたいとのことである。これまでも修士終了後数年後に取得した例もある。

#### ③外国との交流により院生の国際的な関心を育てる。

外国人留学生は、言うまでもないが、母国や国際的学会での発表および帰省を通じていろいろなイベントに参加して国際的交流を図っている。日本人学生は、カリキュラム等での交流は勿論のこと、級友を通じたり各種イベントを通じて国際的感覚を養っていると思われるが、資格やスキルの取得が先行するのか、残念なことに少し話題に乏しい。

#### ④積極的な補助金獲得に励むための指導の充実をはかる。

科学研究費補助金は教員の1人が継続して受給している。また、日本学生支援機構の奨学金(1名)は言うにおよばず、私費外国人留学生授業料減免対象者は外国人留学生の全員がその恩恵を受けている。

#### ⑤提携大学との連携をさらに深め、地域・社会の研究を強化する。

今のところは、入学試験を台湾高雄や中国大連の現地で行っている程度の提携に止まっている。公開シンポジウムなど各種のイベントや共同研究を通じて地域との連携を深めて行きたいところである。大学院自体での新しい提携校は今のところ他にはない。しかしながら、もし大学で連携の方針が検討され体制のアウトラインが整ったならば、対応できる体制にある。

札幌大学、沖縄国際大学および本学の三大学院で毎年行う三大学院共同シンポジウムは、平成25年度は本学が当番校となり、本学で開催された。

## (2) 福祉社会学研究科

### ①論文作成(博士論文を含む)・審査のステップを充実し、学位論文の水準向上につとめる。

学位論文中間報告会の活性化，学会発表や大学院学術論集への参加・投稿の推奨により，学位論文の水準向上が図られた。平成 25 年度以降，修士論文については全論文を冊子にまとめ図書館に保存するとともに，博士論文については各論文を図書館に保存するとともに，ネット公表することとなった。なお，本研究科の平成 26 年 3 月の修了者は博士前期課程 9 名，博士後期課程修了者 2 名で，満期退学者を含め 3 名の博士（社会福祉学）が誕生した。

### ②国内外との共同研究につとめ，地域に貢献する新しい研究を開発する。

佐賀大学との連携が部分的には実現したが，大きな進展はみられなかった。科研費に係る沖縄大学との共同研究は実現している。なお，本研究科博士前期課程の学生が華東師範大学大学院の交換留学生になったのも他機関との連携の一つであり特記したい。

### ③科学研究費など外部資金の導入につとめる。

平成 23 年度から実現をみており，地域の特性を十分勘案したテーマによる新規性の高い研究が展開されている。これに関連して，平成 24 年度から競争的外部資金等により行われる調査研究プロジェクトに院生 2 名を研究協力者として位置づけた「参加型プロジェクト研究」がスタートしていたが，平成 26 年 3 月，科研報告書『島嶼地域の保健福祉と地域再生—奄美・八重山の調査から—』が発行された。

### ④博士後期課程在学学生および過年度修了生が九州地域の大学に「助教」として採用された。さらに就職支援につとめる。

平成 26 年 3 月の修了者のほとんどが現職を有する社会人である。博士後期課程修了者 1 名は九州看護福祉大学専任講師である。前期課程修了者 1 名が神村学園専門学校教員に採用された。

### ⑤研究活動の一環として，「研究科主催公開シンポジウム」と研究会を開催する。

平成 25 年 10 月 12 日には，本研究科主催の公開シンポジウムが「学びの意義と価値，そして可能性」と題し開催され，高山忠雄教授が「研究科の技術と伝統—学びの世界」と題する基調講演を行い，その後のシンポジウムでは本研究科の院生ならびに修了者がそれぞれの立場から研究報告を行った。また，院生主導の第 2 回研究会が平成 25 年 12 月 21 日に「日本の子ども福祉と中国の高齢者福祉事情」と題し開催され，学生・市民等約 60 名の参加者があり盛況であった。

## (3) 国際文化研究科

### ①教育内容の充実・整備について

- 1) 博士後期課程では，研究指導担当者，および講義科目担当者の審査を行ない，いずれも平成 25 年度から授業担当者として新しく加わることになった。
- 2) 専攻分野科目から 9 科目削減し 2 科目を新設するとともに，ワークショップ科目に 4 科目を新設した。
- 3) 平成 25 年 11 月 30 日に，国際文化研究科初の公開研究会「地域文化の継承と創造」が，本研究科の教員と大学院生の協力のもと，学外者も多く参加して成功裏

に実施された。

## ②論文指導力の強化について

指導教員に加えて副指導教員を配置する件については、研究科会議の合意を得て実施した。今後さらに十全なる体制づくりに努める。

## ③留学生に対する支援活動について

留学生に対する「日本語教育プログラムを活用した支援活動」については、その方針に基づき留学生を指導した。

## ④就職支援について

前期課程修了者は就職したり博士後期課程に進学したりして進路が決まった。博士後期課程修了者は1名のみで、本研究科研究生として研究活動を継続している。

## ⑤大学院特待生制度の実現について

成績優秀な学部生を対象とする「大学院入試特待生制度」については、研究科会議で慎重に審議したが、実現に至らず、継続審議としてさらに検討することになった。

## 【短期大学部】

### (1) 鹿児島国際大学短期大学部

①短期大学部最後の学生を全員卒業させることができた。一連のファイナルセレモニーと卒業記念パーティも卒業生・もくれん会の協力を得て、無事終わることができた。

②就職率は90%を目指したが、最終的には、100%を達成することができた。

## 2 教育の力・研究力の向上を目指す事業計画および報告

### (1) 総合企画室 (公財) 大学基準協会の自己点検・評価に係る事業計画

平成24年度に大学基準協会の大学評価(認証評価)を受審し、「適合」の判定を受けた。その際に指摘事項として、8項目の「努力課題」ならびに1項目の「改善勧告」が付されている。

①平成28年7月末日までに、「提言に対する改善報告書」を大学基準協会に提出しなければならない。これまでの「努力課題」「改善勧告」事項の状況を確認する為、自己点検・評価実施委員会及び自己点検・評価運営委員会を開催し、学部学科及び事務局の取組み等について中間報告を行なった。今後は改善報告書提出に向け、最終的な総括を行なっていくことが確認された。

②「自己点検・評価」と「事業計画」との関連性が希薄である為、煩雑した状況となっている。現在、簡素化に向けた見直しを行なっている。

③ホームページのアクセス数を上げる方策として、ア.スマートフォンやタブレット端末に対応したトップページ(メインページ)の構築、イ.英語サイトのリニューアル、ウ.ツイッターの常時発信(You Tube 動画発信含む)、エ.特別企画「トップランナー」コンテンツ作成を実施してきており、魅力的なサイトとなるよう刷新等を図ってきている。順調にアクセス数を伸ばしてきている。

### (2) 学生部 学生支援活動にかかわる事業計画

**①奨学金支援** 奨学金受給学生は6割をこえ、4年前と比べると5~6%増加しているが、奨学金なしでは困る学生が多い。今後とも奨学金の充実を図り就学の安定性を高める努力をする。

学生課では、各種奨学金説明会の出席率を高め、奨学金の充実を進めている。

なお、現行の奨学金制度(特待生や特別奨学生)と新設された入学時の奨学金制度(HONORS特待生、入学試験成績優秀者学費等減免制度、経済的理由により修学困難な者に対する学費等減免制度)の当該者の重複等については運用面を再確認し、さらなる学生の経済的負担の軽減を図っていく必要がある。

留学生の奨学金等の経済的支援は、私費留学生に対し授業料減免制度(本年度より25%減免、昨年度までの入学者については35%減免)を実施している。また、主に新生用の宿舎として国際交流会館を運用し、低廉な居室を提供している。さらに会館外の民間アパート居住者については、毎月の家賃補助を実施している。

**②学生相談室は学生の対人関係・学生生活・卒業後の進路などについて、機能の強化を図り、早期の対応を心掛ける。**

学生相談室は、学外専門相談員(臨床心理士)1人と学内選任相談員(各学部1人の専任教員)3人、計4人で運営している。昨年度の相談(利用)件数は714件で、その相談内容は年々多岐にわたってきており、相談者は学生にとどまらず学生対応に苦慮している教職員や保護者など増加傾向にある。

今後の課題としては、組織上の強化を図り、専任の運営責任者のもとで組織的で恒常的な運営ができるようにして、より効果的な対応ができるようにしなければならない。

**③学生の半数がサークル活動に参加しているが、HONORS特待生制度が導入され、大学全体の活気が増すと予測される。サークル活動は勉学とともに貴重な「学び」の場である。今後とも課外活動の活性化を図る。**

平成23年度以降サークル加入率が向上している。ちなみに、平成25年度の加入率は51.6%であり、前年度比+3.0%となっている。加入率向上は、HONORS特待生に起因する部分もあると思われ、大学全体の活気につながる。サークル活動も大学生活において貴重な「学び」の場であるとの認識の下、積極的に支援を行い、さらなる活性化を図る。

**④退学率が減少するよう、学部・学科と連動した活動をすすめる。**

平成25年度の退学率は4.4%(前年度比+0.5%)となった。学部・学科において、退学率を抑えるべく方策を定め尽力しており、学生部も退学率低下を実現するために情報発信等を行っているが、なかなか改善に結びついていない。学部・学科、さらにはクラス担任やゼミ担当者とも連携をより強め、改善に当たりたい。これまでの傾向を考慮し、平成26年度は3.5%を目標値とする。

**⑤留学生は本学にとって貴重な国際交流の資源と考え、教職員一体となって、関係機関との連携を深め、総合的支援を行う。**

留学生の総合的支援については学生部・国際交流支援室を中心に行っており、本年度末現在で104名の留学生が在学している(学部生・大学院生・交換留学生を含む)。

入・出国時には送迎を行っており、留学生の多い秋期入学時にはバスを予約して福岡空港で新生を迎えている。また、交換留学生の受入時及び留学終了時には、



個々に鹿児島空港もしくは鹿児島中央駅まで同行して対応した。

入学当初は学生生活を順調にスタートさせるために、留学生オリエンテーションを実施し、在留のための諸手続き(住民登録や国民健康保険加入等)についても、個別に支援を行った。また、学部・新入生には留学生チューター制度により、日本人学生が個別の「留学生チューター」となり、週一回の相互学習・交流の時間を設けて留学生をサポートしている。

さらに、交流行事の一環として、前・後期各1回、留学生チューターと新入留学生を対象にしたバスツアーを実施し、チューターと留学生の交流促進と鹿児島の特色ある名所の体験

学習を行ったり、学生の国際交流サークル及び留学生会と連携して留学生の歓迎会や学外キャンプを実施するなど国際交流の機会を設けている。

### (3) 研究教育開発センター 教育・研究活動の推進

①平成18年4月に発足したセンターはFDの開発、ウォーミングアップ学習(入学前教育)等、教育内容・方法の改善に努めてきた(授業公開・教職員による授業参観・学生による授業評価など)。

#### 1) FDの開発

「新入生ゼミナールを含めた初年次教育の在り方」について、当センターワーキンググループで、フレッシュマンテストの実施について検討したが、内容や実施方法についてももう少し検討の余地があるとして、来年度春実施は保留になった。しかし、引き続き検討していく予定である。

#### 2) ウォーミングアップ学習

当センターワーキンググループが作成したセンター案を基に各学科で独自案を作成。教授会・大学評議会の審議を経て、平成25年度から推薦入試合格者及びHONORS入試合格者のみを対象に、新ウォーミングアップ学習を実施した。

新ウォーミングアップ学習内容は各学科で異なるが、基本的な構成は次の通りである。

Step1(「いざない」 各学科の課題に取り組む(新聞記事・音楽会・テーマの感想・質問・回答を提出))。

Step2(「大学の授業へ行ってみよう」 各教員が指定した1月中に開講している普通の授業を参観する)。

Step3(「読書感想」 指定図書を読書感想文を書く)。

#### 3) 授業公開・授業参観

前期を5月13日(月)から、後期を10月14日(月)から実施。授業公開数341科目。参観者は非常勤を含む157名(内事務職員14名)であった。

近年、参加者数が少ない傾向であるが、時間割の関係から、参観或いは公開できる授業が限定される事から、授業公開・参観のあり方についての抜本的な検討が必要と考えている。

#### 4) 学生による授業評価

前期を7月8日(月)～27日(土)、後期を1月6日(月)～5日(土)に実施。実施率は専任92.6%、非常勤講師92.4%。集計結果は各教員へ配布し、前期は締め切り

を10月12日(土)として、授業担当者所見を回収した。

後期は1月6日(月)～25日(土)に実施。実施率は90.1%。(293教員中264名が未実施)。前期同様、集計結果を各教員へ配布し、締切を4月19日(土)として、授業担当者所見記入を依頼中である。

なお、昨年同様、今年度も「授業援助を要する評価3.0以下の該当者」はいなかった。

## ②平成25年度から研究支援を加え、教員の研究活動・教育力向上にもつとめる(外部資金の確保など)。

### 1)外部資金の確保

科学研究費助成事業について、平成25年度は新規採択者2名(平成25年度本学申請件数9件)が加わり、研究代表者は7件となった。また、他機関の研究分担者として参画している研究者が14件となっている。

平成26年度に向けては、啓発活動および他機関からの情報収集を行い、10月9日(水)には、補助金確保啓発の一環として、全教職員を対象に「科研費公募要領説明会」を開催した。参加者は院生を含め8名。

結果、平成26年度補助にむけ新規15件を申請した。

また、8月には、日本学術振興会との共催で「ひらめき・ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」(研究成果の社会還元・普及事業)を研究代表者(国際文化学部中園聡教授)とともに実施した。高校生の参加者は生徒25名引率3名の計28名。学部学生や大学院生等の積極的な活動もあり、盛況時に終わった。

## (4)就職キャリアセンター キャリア・進路支援

### ①教職協働による学生のキャリア・進路支援を充実させる(学生情報の共有が不可欠)。

就職活動のできていない学生に対しては演習担任、保護者と連携をとりながら支援した。

### ②学生の職業観・勤労観の育成のため、キャリアガイダンス・研修会を通じてキャリア形成の啓発を行う。

a. 1・2年次のキャリアガイダンスでは具体的に就職を意識した学生生活の送り方を説明した。また働く意識の希薄な4年生に対しては面談等で対応した。

b. 3年生に対し各種説明会を実施、対象者の85.3%が参加した。就活のスケジュールから内定獲得までのポイントを説明した。就活に成功した事例や失敗事例など具体的に伝えた。

### ③資格(日商簿記2・3級、FP技能士3級、MOS)取得をサポートする。

学内にてFP技能士3級、MOS講座を実施した。日商簿記講座は応募者不足により今年度は未開講。希望者は学外受講を支援した。

### ④就職活動に必要な基礎学力・自己分析・業界研究・面接対策を支援する。

a. 説明会で就職試験の筆記試験に関連し基礎学力の重要性を学生に伝え意識付けを行った。企業・公務員・教員試験の筆記対策講座を実施した。

b. 121名の学生が自己分析講座を受講した。昨年24名から大幅に増えた。

c. 人事担当者による業界・企業研究講座は11月から1月にかけて12社実施した。

就職キャリアセンター職員による説明会も実施した。

d. 面接試験対策講座だけでなく、模擬集団面接、集団討論も実施した。

#### ⑤対面による直接指導の充実をはかる。

履歴書指導、面接指導を中心に支援した。特に就活に苦慮している学生を重点的に対応した。

#### ⑥積極的な企業訪問による就職の開拓を行う。

企業等の訪問を実施、求人依頼の他企業等の求める人材像を情報収集し学生に伝えた。

【コア目標】平成25年度の就職内定率は92.3%（昨年度比+4.3ポイント）

### （5）入試室 学生確保と広報活動

#### ①高等学校訪問の強化

1) 年間を通して、県内外の高等学校を訪問

今年度の高等学校の訪問校は、宮崎・熊本・福岡・沖縄を入れて1,155校(昨年度745校)で、目標数800校を大幅に上回ることができた。また、年間の計画訪問以外にも臨機応変に+α訪問を実施し、「すぐ動く入試室」、「すぐ対応する入試室」を心掛けた。訪問して直接語る。本学を理解いただく上での最善の方策である。

2) 入試室職員+教職員対応

各学部の学部長、学科長、職員等にも依頼しながら対応した。特に学科に係る内容のガイダンスには先生方を直接派遣して広報に努めた。

3) 訪問強化校の設定

本学に、例年多くの生徒を送りながらも、年々の変動の大きい高等学校6校(錦江湾・加世田・伊集院・国分・鹿児島商業・松陽高等学校)を、訪問強化校として指定し、常に情報のやり取りに努め、意思疎通を図った。延べ58回の訪問を実施した。キャンパス見学会においては、強化校6校で130人(昨年度91人)、占有率14.7パーセントの集客であった。また、強化校から264人の志願者を得た。これは県内志願者の23.6%を占める。

#### ②県外へのマーケット・シェア拡大

沖縄県・熊本県・宮崎県等県外に打って出る

生徒数が減少傾向にある中、志願者・入学者のキープを図るため、沖縄県に駐在員を配置するなど、今年度特に意識して県外を攻めた。訪問回数は、沖縄県304校(昨年度20校)、熊本県65校(昨年度35校)、宮崎県69校(昨年度37校)である。3県には、本学の存在を知ってもらう見地から、本県同様11月からTVのCMも流し広報に努めた。

#### ③HONORS 特待生や学費等減免制度の推進

制度の周知徹底のため高等学校訪問、入試説明会、進学説明会等様々な機会を通して広報に努めた。

#### ④本学主催入試説明会の開催

5地区(鹿児島・薩摩川内・鹿屋・霧島・奄美大島)で開催

6月20日の鹿児島会場を皮切りに5会場で実施した。参加高等学校87校(昨年度87校)、高等学校教員出席者数140人(昨年度139人)であった。大学の現況や就職状

況，入学試験概要，インターンシップ取り組みなどを説明し，本学を理解いただく機会となった。

#### ⑤進学説明会

会場型説明会への積極的参加

4月17日(水)を皮切りに51会場(昨年度51会場)への参加，動員実績人数898人(昨年度836人)であった。進学の方角を本学に向けていただくよう懇切丁寧な説明に心掛けた。

#### ⑥キャンパス見学会の充実

7月・8月・10月に実施

(7月21日⇒547人)+(8月5日⇒188人)+(10月12日⇒148人)計883人の参加を得た。2012年度の計890人，2011年度の計710人，2010年度の計766人である。学生の歓迎セレモニーや模擬授業，学科企画，体験コーナー，保護者説明会，個別相談コーナーでの対応等充実した見学会となった。

#### ⑦高等学校からの大学来校の推進

本学への理解と意識の喚起

今年度，大学への訪問を喚起するため県内外の高等学校の校長及びPTA，進路指導部宛てに依頼文書を出し訪問を喚起した。訪問は21校836人であった。本学からの依頼文書を見て計画されているようだ。来校して説明や施設見学をしていただくことが，より本学への理解に繋がると考える。

#### ⑧本学卒業の高等学校教員との教育懇談会

鹿児島市で実施

本学を結ぶパイプとして，OB教職員との語りの中で，お互いを知り，本学への理解を深める機会となった。なお，本学同窓会との連携を強めるため，小・中・高・大学を含めた支部としての組織作りの足固めを行った。

#### ⑨出張講義

41回実施された。地域に貢献できる取り組みで，本学の広報の重要な部分を占めている。

#### ⑩テレビCM，受験情報雑誌等掲載，新聞広告，WEB媒体等による効果的広報

広告代理店との連携を密に図りながら広報戦略を練る中で，計画的な広報に努め，認知度アップに努めた。

#### ⑪HPとの連携

受験生サイトの充実(魅力発信)

総合企画室の広報係と常に連携を図りながら，入試関係の情報発信に努めた。

### (6) 教務部 今後の課題と対策

#### ①平成27年度に向けたカリキュラムの見直しと教職資格の精査を行う。

平成27年度に向けた新カリキュラムと教職資格については，各学科から出されたカリキュラム案を精査し，教務課の意見をまとめて回答したものの，結局，平成27年度に向けた改革が頓挫した本問題は先送りとなった。

#### ②「不本意入学生」を本学の学生生活・学習に興味を抱かせる「学生の居場所」を，「新入生ゼミナール(全学科1年次履修指定科目)」等を通じて作る。

各学科が工夫しながら、「新入生ゼミナール」等を通じて本問題に取り組んでいる。学生アシスタント(SA)を導入するなどして、大きな成果をあげている学科・ゼミもある。

**③「進級制度」を実質的に活用し退学率・留年率の減少をはかる。**

2年続けて進級要件を満たさず、現年次に留め置かれた学生がいるなど、進級制度が十分に機能しているとは言えない。退学率や留年率も改善されたわけではなく、学習支援の充実と並行して、本制度の検証と見直しが必要である。

**④「履修モデル」をさらに整備して体系的な学修を支援する。**

新カリキュラムの策定に合わせた「履修モデル」の整備で体系的な学修支援ができるように計画していたが、新カリキュラム策定の見送りにより、今後の課題となった。同時に、認証評価で指摘されたCAP制やGPA制度についても新カリキュラムとの関連で検討を進める必要がある。

**⑤「出講義等に関する理事会の方針」(平成25年4月施行)の真の意味をふまえ、オフィスアワーを活用する。**

オフィスアワーの更なる充実が必要である。退学率や留年率の減少につなげるためにも、普段から学生教育や学生指導・支援に真剣に取り組んだが、一部の教職員ばかりではなく、全学的な取組が欠かせない。

**⑥学内改善対策**

**a. 学生を支えるゼミ担当者の育成**

教職課程並びに資格取得課程での履修辞退者に対する教員並びに担当部局が学生に対して適切な対応を心掛け、履修修得を辞退するため手続きに来る学生に対して、以下のような段階を経ることで、学生自身が時間をかけて慎重に判断できるような体制を取ることで、ゼミ担当との関係性(ゼミ担当者の育成)を深めることを期待している。

最近の状況では、以前よりゼミ担当者と学生との連携が取れるようになってきている。

- ア. 部局担当者が辞退理由に至るまでの経過を学生本人から聴く。
- イ. 得られた情報から現在の状況に至った心情の理解に努める。
- ウ. これまでの本人の履修努力を称賛し、継続又は再考を働きかける。
- エ. 辞退の意思が固い場合は、今後の進み方について構想を問う。
- オ. 辞退の手続きとして、保護者の承諾・ゼミ担当者の了解・本人の辞退届書の提出が必要なことを説明する。
- カ. 書類の提出により、学内の履修課程の名簿から削除する。

**b. 学友会との協同**

学生の孤立化が目立ってきていることと教職課程並びに資格取得に係る履修科目等の登録が不適切な学生へ登録修正指導が年々増加してきている。時間割りの組み方や履修相談に来る学生に対して、学友の存在や仲間意識を啓発するような対応に心掛けるようにしている。担当部署でも積極的に働き掛けているがまだ成果はみられていない。

学友会との協同体制を組んで一般学生が相談できる体制が作れることが、大学での存在感や学生生活への積極的な意欲づくりになると思われる。

**c. 実習センター関係の教職・資格に関するコミュニケーションの充実（学生を中心に置き、ゼミ担当者とセンター職員との関係の深化）**

各種実習委員会を通して、実習担当者への働きかけを積極的に委員会の意向として実習に関係する巡回指導者やゼミ担当者へ働きかけるように努めた。年々、ゼミ担当者や巡回指導者からの学生に関する情報提供が増えていることから、学生の実習への教職員の連携が図れつつある。

**（7）地域総合研究所**

**①共同研究**

1) 徳之島視察は、3 町(徳之島町, 伊仙町, 天城町) 役場と社会福祉協議会へ訪問し情報収集を行った。また、地域総合研究第 41 巻第 2 号において、「研究所通信」のなかで「徳之島レポート」として報告した。

2) 南九州市社会福祉協議会との共同研究として、高齢者の孤立と生活ニーズ調査を行い、地域総合研究第 41 巻 2 号として「調査報告」を掲載した。なお、2014 年 4 月調査員になった南九州市在宅福祉アドバイザーを対象にした研修会において報告を行った。

**②委託研究**

「南大隅町の地域福祉計画策定予備調査」として、島泊地区に対する調査を行い報告書を作成した。また、職員研修をはじめ地域福祉推進検討会において、アドバイザーやコーディネータの役割を果たした。予備調査の目的は達成され、次年度も引き続き委託研究を受けることとなっている。

**（8）情報処理センター 情報処理施設・設備関係**

①4 号館 3 階 431 教室を情報処理教室へ改修し情報処理教育に活用した。

②学生情報システム（LiveCampus）を 8 月にリプレースした。同時に機能追加・修正も行った。

③学内ネットワークの一部リプレースと、一部サーバーを仮想サーバーへ移行した。

④教職員用パソコンのウイルスに対するセキュリティ強化を行った。

⑤出欠記録システムの機能追加・修正を行った。

⑥研究室パソコンおよびプリンターのリプレースを行った。

**（9）図書館 学習支援、地域・社会との連携**

①学習支援として、各学科選定図書委員が学科選定図書を選書、図書館員と図書館サポーターが授業関連図書の選書・収集を行った。

②利用者教育：ガイダンス、データベース利用説明会を実施した。

③学外利用者への施設開放と学習支援：見学者に「概要」と「パンフレット」等を配布し、図書館利用を促した。

④文部科学大臣委嘱司書講習（7 月 22 日～9 月 23 日）を 43 名が受講した。

⑤学術情報の公開：鹿児島国際大学リポジトリについて、電子ファイルでの提供により、登録業務がスムーズに行えた。

以上 鹿児島国際大学・鹿児島国際大学短期大学部

## 鹿児島高等学校

### 1 基本方針

平成24年度は、「審」の年度であったが、25年度は「伸」の年度とする。90周年にあたることを念頭に次の5項目について1段レベルアップ(伸)を図る。

- (1) 教科教育力(授業力)・学級経営力 ～ 教科活動・学科活動・学年活動
- (2) 生徒指導力(あいさつ指導・服装指導・美化指導)
- (3) 進学・就職の実績
- (4) 要支援生徒の指導
- (5) 三弧会・保護委員会の自主的活動

### 2 教育計画

#### (1) 教務部

##### ①具体的で有意義な結論の出せる会議の開催

以前より成績分析会、イベントのための会議、生徒募集関係の会議が増えてきて実績を上げようとしているが、もっと職員会議を有効利用していくように今後検討を続けたい。

##### ②教育力を高める評価制度の再検討

教師力を上げるために研修・評価の見直しを検討して、新任教師に対する一年計画を作成した。

##### ③入試作業のマニュアルを完成する。

各部門(印刷・転記・採点等)に担当を決め、各部門で検討し平成26年10月までには終えるように計画を立てた。

#### (2) 生徒指導部

##### ①服装・校則遵守指導の徹底

毎月実施している「頭髪・服装検査」の年間の合格率は83%と上向きの傾向であるが、違反する生徒の殆どが同一人物であるので、対応が必要である。

問題行動については、昨年の64名に対し、今年度32名と減少した。

##### ②交通安全・通学マナー指導の徹底

学期が進むにつれ減少したが、命に関わるケースも懸念されるので、「事故ゼロ」を目標に指導していきたい。

登下校時のマナーに関する苦情が数件あるので、指導が必要である(学校周辺の登下校指導は毎月行っている)。

##### ③サイバー犯罪やインターネットに関するモラル指導の徹底

ネット関係によるいじめや中傷など若干の報告はきているが、問題行動として特別指導を行ったものが2件、仲裁指導を行ったものが3件ありいずれも解決した。

##### ④共通理解・共通実践と率先垂範の推進

先生方の協力体制は概ね浸透しており、共通理解のもと指導しやすい。生徒たちの自覚を覚醒できるような指導を強化したい。

### (3) 進学指導部

#### ①教科と連携し学年・学科に応じた進学体制を強化する。

1年普通科では数学の習熟度別授業を実施、補習でも数学と英語で習熟度別を実施した。1年普通科全体での学力を向上させるための手だてではあるが、上位層の育成という点では難しい。2年英数科は、新課程入試に対応する理科の授業進度も調整できた。3年英数科普通科ともに上層は健闘し、大学入試センター試験でも結果を出せた。また、主に英数科の課題としてあげた「思考力・判断力を育成するための授業方法の改善」は次年度への継続課題である。

#### ②生徒一人ひとりの学力を把握し、保護者との十分な連携によりの確な進路指導を行う。

3年生は5・10月に二者面談、4・7～8・12～1月に三者面談を実施した。1・2年生は4月に家庭訪問・三者面談、5・10・2月に二者面談を実施した。7月には1学年PTAで学科個別に進学状況に関して、また、3学年PTAでは進学希望者の保護者に対し、進学状況に関して情報を提供した。10月の2学年英数科PTAでは進学情報の提供に加え、3年へ向けての学習・進路選択の心構えなどについて説明した。3年生では、年間を通じて、学校種別・試験形態別に、生徒・保護者の意向に添って適切に進路指導が行われた。

#### ③生徒の進路実現のため、学力の向上に努め特に難関大志望者の合格を目指す。

進路マップ、スタディサポート、対外模試で、各学科・学年の学力の状況を他校とも比較し、課題について検討し対策を練った。特に、英数科の難関大を目指す生徒には意識づけと学習方法の会得が必要であるため、3年生については個別指導も実施した。結果的には大学入試センター試験の高得点者が、安全志向から準難関大の受験をしたため、難関大合格者は出なかった。

### (4) 就職指導部

#### ①3年間を見据えた進路指導体制を確立する。

各種検査を実施し、早期進路目標の設定等、就職希望者全員の進路実現を計画的に進めることができた。また、進路希望調査の活用に努めた。

#### ②基本的な生活習慣を確立し、学力を強化し難関企業への就職をめざす。

教科との連携を行い授業の中で指導・添削をお願いし効果を上げることができた。また、同一問題集を購入し、継続的な指導を行なうことができた。上級資格取得や個別指導の充実に努めた。

#### ③教科・学年と連携して、キャリア教育を推進する。

学科朝礼、学年朝礼での指導講話の充実や、外部講師によるガイダンスを実施し職業観を育成することができた。就業体験先を増やすことによりインターンシップの構築を図ることができた。

#### ④生徒の興味・適性・能力に応じた職業指導に努める。

企業訪問、企業開拓を実施することにより情報の共有化ができた。また、ハローワークとの連携により生徒が主体的に選択できる指導の徹底が図れた。

#### ⑤雇用情勢に対応した指導を行い、求人企業の拡大に努め、就職率5年連続100%をめざす。



事務職の希望が多く、求人企業の拡大に努めた。また、計画的な企業訪問を実施し、新規企業の求人をもらうことができた。その結果、5年連続100%を達成することができた。

## (5) 保健安全部

### ①朝食を摂る生活習慣の確立

アンケートを実施し、集計結果を学校保健委員会で話題にした。1年生85.0%、2年生78.9%、3年生95.9%の生徒は毎日朝食を摂っている。今後も継続的に食育を行い、食習慣の確立に努める。

### ②安全指導・安全管理の徹底

通学マナー教室や全職員による登下校指導を実施した。今後も外部からの情報や日々の点検活動で把握した実態を全職員で共有化し、危機意識の向上を図る。

### ③意欲的に体力向上に取り組む生徒の育成

授業の中で継続的に体力作りを実践している。90周年体育祭は、生徒主体で運営し、まとまりのある体育祭ができた。長距離走大会もそれぞれ体力に応じて、全力を尽くすことができた。

### ④環境衛生・美化に対する意識と態度の育成

日々の作業や職員による点検を実施して環境美化に努めた。今後更に徹底できるように全職員で共通実践していきたい。

### ⑤避難経路を総合的(火災・地震・水害)に見直す。

避難訓練並びに心肺蘇生法やAEDの利用法などの職員研修を実施した。今後も防災マニュアルや災害時の心構えの周知徹底を行い、避難に対する施設設備の点検を図る。

## 3 生徒募集計画

(1) 生徒募集対策委員会で中長期的な募集活動を検討・策定する。

教務部主催で4月、6月、8月、10月、12月、2月の6回行った。毎回、中学校訪問や体験入学、入試連絡会など直近に行事について話し合った。また、4月の会議では企画広報室から受験生入学生を増やす施策案が18項目提出され、その後の会議で各項目を検討し、2月の説明会など実施することができた。

(2) 校内の情報を収集する体系を確立し、効率的かつ迅速に校内外に広報する。

部活動の活躍や検定資格取得情報などは担当者から教務部に速やかに報告し、教務部から企画広報室に伝達する流れを定めた。しかし、各担当者から教務に速やかに上がってこない場合もあるので意識の向上が望まれる。

校内への広報は朝礼での連絡に加え、校内新聞Green Age(年間9回)に掲載し伝達した。

校外への広報はHPのトピックスを中心に掲載し、中学生対象のZIGZAG(年間2回)でも伝達した。また、公式フェイスブックのサイトを立ち上げた。

(3) 学習塾訪問を組織化すると同時に、連絡会の内容を充実させ連携を強める。

今年度から学習塾訪問担当者を決め、定期的に訪問するように組織化した。対象の学習塾は138校、担当者は17名で年間2回訪問した。

入試連絡会は、今年度は本校で行い、校内見学、学食体験を加えて実施した。アンケート結果から非常に高い満足度がわかる。

訪問担当者の負担が多いとの反省が出されたので、来年度は、担当割りについて検討したい。

(4) 体験入学の内容について見直し、参加者の満足度を向上し受験生増につなげる。

今年度は、夏、秋合わせ3,000人以上の参加者を得ることができた。企画と広報がうまくいった結果だと思われる。過去のアンケートをもとに開会式の内容や時間配分など大幅に見直した。アンケート結果を見ても参加者の満足は高く、鹿児島高校に関心を持ってくれていることがわかる。

参加者の受験率は、夏秋合計で69.3%だったので、来年度は80%以上を目指す。

(5) 中学校訪問の重点校を定め、信頼関係を再構築し受験生の確保につなげる。

近年受験率の低い鹿児島市内の中学校には副校長や教頭、教務主任の先生に訪問してもらい、手厚く情報提供など行い、信頼関係の構築に取り組んだ。

中学校によっては各担任まで情報が伝播されていないことがあるので、そこを改善したい。

#### 4 施設整備計画

(1) 体育館の建替えの検討

体育館(昭和45年建築)及びプール(昭和52年建築)は老朽化が進行している。今年度夏の耐震診断の結果、体育館及びプールは「安全である」との判定を受けた。

当面は、老朽化した設備の更新や建物のリニューアルを検討したい。

(2) プールの屋根修理

プールの屋根補修として、今年度5月にバンポーライト(採光材波板)の交換と、老朽化に伴う安全対策を含めた補修工事を既に行った。プールは築36年経過し、循環装置からプールへの送水噴出機能が悪くなっているため、藻がはりやすい要因にもなっており改善が望まれる。

(3) 犬迫グラウンドの給水設備

犬迫グラウンド及び弓道場の給水は、これまで全て井戸水を使用していたが、飲料用水は今年6月、市水に切り替わった。

#### 5 その他の計画

(1) 窓口対応等に腐心し、保護者並びに生徒からの評価向上に努める。

保護者や地域住民からの連絡や要望、苦情等に対して、丁寧で適切な対応を心掛けている。

(2) 職員の少数精鋭化を図るため業務の見直しと効率化を推進する。

担当者替えにより業務知識の向上に努めた。就学支援金や授業料滞納者にかかる煩雑な業務負担については、今後も簡素化を図っていきたい。

(3) 職場環境改善の一環として始業・離席・終業時のあいさつを励行する。

あいさつ運動を含めた職場環境改善の意識改革を徹底し、今後も課題としていきたい。

以上 鹿児島高等学校

## 鹿児島修学館中学校・高等学校

### 1 基本方針

建学の精神に則り、全人教育を基調として、将来、社会（国家社会・国際社会）の発展と人類の進歩に寄与し得る有為な人材を養成する。

- ①生徒の個性・能力を伸長し、自主性・独立性・創造性を培う。
- ②自由と規律・寛容と協調の心を育てる。
- ③進路実現のための高い学力の養成に努める。
- ④健全で豊かな精神を養い、人生の真理の追究と幸福を追求する人間を育成する。

### 2 教育計画

(1) 教務部 年間の円滑な学校生活の提供と運営

#### ①年間指導計画・授業進度表の作成と実践

年間計画を作成し、4月の学年保護者会において提示した。その後、ほとんどの教科において計画に則った授業が展開された。

#### ②社会人としての基礎力養成

「7つの習慣J」,[よのなか]科の予定されていた内容は実践された。これらを日々の学校生活や学校行事にも取り入れてきてはいるが、より体系化するため現在も検討を続けている。

#### ③教職員の研修

『学級診断尺度Q-U』に関する研修では、資料の効果的活用法が参考となり、学級運営に大いに役立った。11月実施の第2回診断尺度Q-Uで更なる活用がなされた。

書画カメラの活用研究を数学科が行い、その活用例を校内で紹介したあと九数教大会で発表した。書画カメラの活用例がいつでも互いに紹介できるようになった。

おもに夏期休暇を利用して教育センターでの研修や代々木ゼミナールの研修等に参加した。

特別支援に関する研修を実施し、本校の現状や対応策・考え方を共有した。

#### ④授業の公開

保護者会の際に授業参観を実施し、授業内容や生徒の様子を参観してもらった。授業公開週間では、地域の方や受験希望の方にも授業および学校生活全般の参観をしてもらった。

#### ⑤検討課題研究

##### a. 地域との更なる連携・情報発信

「町内会便り」,「掲示板」,「文化交流」,「交通安全」(交通安全協会),「ボランティア清掃」の面で、活動が定着してきている。

##### b. 英語教育の特化

英語教育については、現在取り組んでいるスピーチの作成から発表に至る取り組みを、全生徒に広げることや文化祭にも取り組むことなどを検討された。

##### c. 鹿児島高校・鹿児島国際大学との連携

鹿児島高校との連携としては、教員相互の授業参観や講師依頼、資質向上委員

会の他に、柔道・吹奏楽・音楽同好会の生徒間交流がなされた。鹿児島国際大学との連携としては、国際交流(マレーシア)がテーマの授業、出張講義や講師依頼という形で実践された。

#### d. 学校行事の見直しと改善

主に教育キャンプ・遠足・遠行についての見直しがなされた。

### (2) 進路企画部 生徒の能力を拓く指導力の改善と向上

#### ①生徒個々の目標達成のための学力の向上

##### a. 効率的な補習等の実施

中学生の朝読書、高校生の朝補習、放課後補習ともに定着している。特に高校3年生においては、前年度まで一斉授業の形態をとっていた放課後補習を個別指導の時間として、不得意教科の添削指導、また実技指導等にあて、よりそれぞれの目標に応じた学習ができるように設定し、個々の生徒の力を伸ばすことができた。

##### b. 個々の生徒の目標・学力について教師間の共通理解

高校3年生においては、7月、10月、12月に進路検討会を持ち、各教科の立場から個々の生徒の成績を分析し、教科指導、また志望校の決定に活かした。また、学年目標等については学期ごとに、また模擬試験は結果が出るごとに、その都度学年・教科で検証し、生徒理解に努めた。

##### c. 個人指導の充実

生徒の学習に対する意識を把握するため、「学習に関するアンケート」を5月に実施した。学年、学級の集団としての傾向や推移をとらえるとともに、個々の生徒については、その結果を面談やその後の指導に活かした。また、高校生においては、今年度から模擬試験の答案と成績個票をファイルする「模擬試験の記録」帳を作成し、そのファイルを持って、教科担当者と面談し、試験の反省、及び今後の取り組みなどについて指導を仰ぐ時間を設け、より個々の生徒に応じた指導ができるように取り組んだ。

#### ②明確な進路意識の確立

##### a. 上級学校または職業への興味・関心の喚起

中学3年生以上の生徒を対象にOBトークを実施し、中学・高校時代の過ごし方や大学受験に向けた学習方法、また目標の持ち方など、身近な先輩の話を通して、進路に対する意識付けを図った。

#### ③進路情報の提供

##### a. 保護者会・進路ガイダンスの開催

外部講師を招いて、5月には全保護者に対して、今社会が求めている力について、また7月には高校1年生徒・保護者に対して、文理選択を含めた進路選択についての講演会を実施した。12月には、高校2年生徒・保護者に対して、外部講師を招き、大学入試に向けての動機付けの講演を開催し、3年生0学期の意識を高めた。

##### b. 進路便りの発行

長期休業中の学習方法、OBトークの様子、センター試験の概況などを掲載した。

#### ④授業の活性化

##### a. 研究授業，授業評価の実施

1学期末と3学期末に生徒からの教科担当者の授業内容に関するアンケートをとり、その結果を各先生にフィードバックし、先生方の指導力・授業力の向上を図った。

10月下旬には、英語科の下入佐教諭が研究授業を実施し、鹿児島国際大学から指導助言者として飯田教授を招き、全員で授業研究に取り組んだ。

##### b. 指導力向上のための研修・視察の実施

夏期休業中を使って、国語科，社会科，数学科，英語科の各1名の先生が，大手予備校の授業法研究の研修に参加し，授業の在り方やセンター試験，また個別試験の対策についての研鑽を積んだ。

#### ⑤社会人基礎力の養成

##### a. 「未来マップ」の作成

「未来マップ」は，中学1年生と高校1年生がそれぞれ2学期末から3学期当初にかけて作成し，自分の進路を検討する機会を設けた。

##### b. 「OBトーク」の実施

8月には，今春大学に入学した3名のOBの，また9月にはケンブリッジ大学の院生の岡本尚也さん(平成15年3月鹿児島修学館高校卒)の講演を実施した。広い視野から世界をとらえた岡本さんの講演は，予定を30分もオーバーする90分の講演になったが，生徒たちは最後までメモをとりながら熱心に聴講していた。

#### (3) 生徒指導部 全員で協力して取り組む生徒指導

全員で協力して取り組む生徒指導を実現するために毎週水曜日に会を開いた。学年の状況や問題点を共有し，必要な対応を協議し実践することができた。

生徒の問題行動についても，生徒指導部が学年・担任と連携し，迅速・正確・誠実に対応することができた。

##### ①基本的生活習慣の確立と社会人基礎力の養成

本年度は各教室の机・椅子・棚の整頓状況を週末に点検した。公共の場をお互い気持ちよく利用することと「置き勉」を防止し，自宅学習を確保する必要があるからである。具体策として4教科の資料集や辞典など置いてよいものをリスト化し，整理整頓の仕方を明確に指示した。生徒会と協力して取り組むことで，ほとんどの教室で整然とした棚の利用ができるようになった。

時間厳守については遅刻の段階的指導を徹底した。8時5分からの中学の朝読書，7時45分からの高校の朝補習への遅刻者に対し，3回目の担任指導，6回目の学年主任指導などを徹底し，指導人数・回数ともに減少した。授業開始や清掃の取り掛かり等についても良好であった。あいさつについては，校門指導を兼ねて職員が生徒会と共に声かけを行った。始業1分前着席黙想の実施についてはクラスによって差があるので，今後も徹底を図りたい。

マナーやモラルの啓発については，年度当初の1ヶ月間バス停での乗車指導を実施した。自転車通学の指導も街頭に立ち指導した。スクールバス利用者には待つ場所，車内でのマナーについて9・10月に指導を実施した。

## ②生徒会の活性化

### a. 学校行事への生徒参加

4月の体育祭は、担当職員と中学高校の生徒会が打ち合わせを入念に行い、準備から当日の運営まで生徒会を中心に積極的な運営ができた。

9月の文化祭は中高生徒会を中心に企画運営した。中学生の合唱コンクール、文化部の発表など練習の成果が出ていた。展示部門は例年全校で取り組んでいたフォト五七五を中学1年だけにして学年で特色のある展示ができるようにした。

### b. あいさつ運動、朝の清掃活動、ボランティア活動、部活動の活性化

夏休み中に実施されたサマーボランティア、ボランティアリーダー研修会、24時間テレビ募金活動等に参加した。

## ③生徒自身の健康への意識高揚

### a. 健康診断等の全員受診、学校保健委員会の開催、保健だよりの発行

新年度の健康診断は不登校傾向の生徒を除いて、ほぼ全員が受診できた。保護者への通知も速やかに実施し、二次検診等についても個別に連絡して受診を促した。

学校保健委員会は「修学館生の睡眠」についてアンケートをとった。記名式だったため、個々の健康面でのフォローにも役立っている。また、当日の研究協議も活発な意見が出され、実りある会になった。

生徒が読みたくなる保健便り「えがお」を心がけているが、なかなか手に取ってもらうのは大変である。せめて、保護者には届くようにしたい。

### b. 心肺蘇生法講習会の実施、保健講話の実施

AEDの講習会は皆真剣に参加していた。安全点検は意識が高まってきている。

## ④生徒相談の充実

教育相談の充実という面ではSC（スクールカウンセラー）が登校支援委員会に参加したり、別室登校生徒と面接、教員との情報交換を密に行い、面接数も増加した。

絆週間は1回目を5/27～6/14、2回目を10/21～11/8に実施し、「絆週間のまとめ」の報告を各学年にお願いして情報の共有化を図った。

いじめ調査は1回目を7/18、2回目を12/11に実施し、具体的な状況を共有化した。

不登校実態調査は、1回目は6月下旬、2回目は10月上旬、3回目は1月中旬に実施。6/27・7/18・2/7に登校支援委員会を実施。7/18・2/7にはSCも参加。教務との連携も図る。

別室登校の生徒には、学年の教員のみならず、SCにも話を聞いていただいた。

道徳の涵養については、全国人権擁護委員連合会の「種をまこう」[人権擁護のパンプレット]をいただいたので、中1生に朝読書で読ませて感想を書かせた。

## ⑤ホスピタリティの向上

### a. Q-Uの実施

クラスの生徒の特性、学級集団の状態を把握するQ-Uを5月に実施。その結果を基にした職員研修を6月に実施し、クラス運営に生かせるようにした。11月にも2回目のQ-Uを実施し、学校生活の満足度をクラス単位で上げる取り組み

を行った。

#### b. 学校周辺および通学路の清掃

中学 1 年生は宿泊研修，中学 2 年生はチャレンジカップ，他学年は L H R 等を使って学校周辺及び通学路の清掃活動に取り組んだ。

### 3 生徒募集計画

(1) 総合企画部 全員力で，より効果的な広報を

#### ①より効果的な塾・学校訪問の実施

##### a. 4～5 月 訪問塾の新規開拓

日置・いちき串木野市地区，北薩地区の塾を新たに 20 近くリストアップできた。

##### b. 6 月，9 月，11 月 塾・学校訪問(案内)

6 月にはオープンスクールの案内及び学校案内パンフレットの配布，9 月には学校説明会の案内のための，11 月には願書配布のための塾・学校訪問を実施した。

##### c. 1～3 月 塾・学校訪問(報告・お礼)

1 月には前期入試に協力してもらった塾へ，お礼および後期入試の案内のための訪問を行った。1 月末には高校入試の結果報告のために鹿児島市内と始良方面の中学校の訪問を行った。さらに，2 月から 3 月にかけて，入学手続きのあった小学校，中学校へ，手続き者の報告と情報収集のための訪問を行った。

##### d. 公立中での学校説明会への参加

今年度は正式な形での説明会に 11 校，昼休みでの開催が 8 校の計 19 校で目標の 10 校を大きく上回った。(H24 は 8 校)

#### ②より効果的なイベントの運営

##### a. オープンスクール

7 月 21 日(日)に P T A バザーと同時開催。233 名 118 組の参加。昨年度の 221 名 102 組からは特に組数が大きく伸びた。

##### b. 塾対象説明会

10 月 8 日(火)の開催予定を台風接近のため 10 月 22 日(火)に延期。最初の参加予定者は 38 名だったが，最終的に 30 名の参加にとどまった。

##### c. 学校説明会

予定通りに 3 回実施。参加者アンケートによる満足度は例年以上に高かった。参加者の合計は 348 名(197 組)であった。

#### ③より効果的な W e b の活用及び校内の情報共有化

##### a. ホームページの更新

G I F アニメを使うことにより，昨年度よりトップページの充実を図ることができた。週 1 回の更新は予定通り実施できた。2 月上旬に新しい H P へリニューアルした。

##### b. 校内外への情報発信

各部の H P 係りにお願いして掲示板への掲示および，H P 掲載の材料を提供してもらった。協力のお陰で H P より充実したものになったが，校内での情報の共有化は十分ではなかったかもしれない。

#### 4 施設整備計画

(1) 事務室・図書室 より魅力ある学校を目指して

①生徒・保護者の満足度向上を図る施設・設備の整備

a. 校内諸設備の利用状況の確認と利用向上策の策定

8月PTAの協力を得て大講義室に長机を設置した。

b. 生徒のニーズに合った施設・設備作り

他私立校の校内自販機の取扱い品目を8月に調査した。

公立高校は3月に実施した。

②図書室のリニューアル

a. 学習・読書に適した書架，学習机等のレイアウト変更

テーマ展示やリクエスト制度の充実を図り図書・資料の充実を図った。

b. 探し易い図書排架への見直し

古い図書を書庫に移動し，図書室内の図書・資料を整理している。

#### 5 その他の計画

(1) PTAとの連携強化

①保護者への連絡体制の見直し

4月に保護者・教職員向けの携帯一斉メールシステムを導入し，活用している。

②教育講演会など共同事業の実施

7月31日(水) バーバラ植村氏の保護者・一般向け教育講演会を実施した。

11月16日(土) 辛島美登里氏の生徒・保護者向け講演とミニライブを実施した。

(2) 同窓会の活性化

①同窓会総会開催に向けての積極的支援

5月3日(金・祝日) 第1回同窓会総会・懇親会開催を支援した。約220名参加

以上 鹿児島修学館中学校・高等学校



## 鹿児島幼稚園

### 1 教育目標

恵まれた自然環境を生かして、元気で、明るく、のびのびと活動する心豊かな幼児を育てる。

《基本方針》

- 一人一人を大切にされた教育に徹する。
- 子どもの主体的な活動を促すとともに、創造性を豊かにする。
- 基本的な生活習慣や態度を育て、豊かな心情を育む。
- 家庭・地域との連携を深め、子どもの自立に向けた基盤を育成する。

キャッチフレーズ：「緑いっぱい 笑顔あふれる 鹿児島幼稚園」

(実績)

- ・教育目標どおり、元気いっぱい、楽しく遊ぶ子どもを育て、成長を実感した保護者から厚い信頼と感謝の言葉をいただくことができた。
- ・「保護者(役員)アンケートの結果をみると、「鹿児島幼稚園に入園させてよかった」は100%の高い評価をいただき、その理由として、質の高い保育内容、広いグラウンド、笑顔で明るく熱心な先生等があげられた。

### 2 重点施策

#### 1. 教育内容の充実

(1) 子どもの一人一人の良さを伸ばす保育の充実

- ①保育内容の見直しと環境づくり
- ②園内研修の充実による教員の指導力の育成
- ③特別支援教育及び「幼児教育相談」の充実
- ④教育実践や園児の活動(作品)の積極的応募

(実績)

- ア. 担任、副担任全員の毎週の保育実践の反省に、園長、主任が指導助言(朱入れ)を行い、職責感の高揚と指導力向上に努めた。
- イ. 全担任(副担任も含む)が年10回、研究保育を行った。鹿児島国際大学の先生からも2回ほど指導助言をいただき、充実した研究協議が実施できた。
- ウ. 週2回、年60回の園内研修を実施できた。ピアノ研修や保育に役立つ実技、特別支援に関する研修等とともに新規採用教員の悩み解決のための研修等も行った。
- エ. 夏季休業中は、全担任が園外研修に積極的に参加するとともに、報告会等で学んだ成果を還元するようにした。
- オ. 特別に支援を要する園児14名に対し、研修を行い適切な支援を工夫するとともに鹿児島国際大学の先生等による教育相談を4回実施し、好評であった。
- カ. 諸コンクール等で入賞を果たす。
  - ・NTTドコモ「未来の絵」学校賞 5年連続
  - ・日本教育弘済会教育論文「動物園ごっこ」優良賞(県内幼稚園は1園だけ)

(2) 心の教育の充実～“明るい笑顔・元気なあいさつの幼稚園に”

- ①基本的な生活習慣・態度の育成
- ②異年齢での交流活動の促進
- ③絵本に親しむ活動の充実
- ④花や野菜の栽培や動物の世話など自然とのふれあいの充実  
(実績)

ア. あらゆる機会にあいさつができる園児を賞賛することで、ていねいなお辞儀をする子どもが増えた。また、スリッパ並べ等を進んで行う子どもも見かけられるように

なった。「はい」の返事が課題である。

イ. 毎月、異年齢活動の「なかよしクラス」を行い、思いやりの心を育んだ。保護者からは「鹿児島幼稚園の子どもは優しい」との声が聞かれる。

ウ. 担任や保護者による定期的な読み聞かせや週末の絵本を借りる活動等により絵本に集中し、絵本大好きな子どもが増えた。

(3) 保健・安全管理の徹底

- ①日々の安全指導の徹底(事故防止・不審者対策)
- ②園バスの安全運行
- ③健康教育の徹底(うがい・手洗いの励行)
- ④給食指導の充実による「食育」の推進  
(実績)

ア. 定期的な安全点検や毎朝の園庭、飼育者、毎日のトイレ清掃等を行った。

また、毎日の終礼等ではけがの状況や原因等について全員で情報を共有し、危機意識を常に高めることに努めた。小さなけがはよくあるが、大きなけが・事故はなかった。

イ. 毎月20日の「安全の日」に遊具の使い方や交通安全教室、避難訓練等を行い園児の危険回避能力を高めるようにした。特に、廊下歩行については指導の改善を行い、走る子どもが少なくなった。

ウ. うがい、手洗い等の励行や家庭との連携等により、インフルエンザ流行時期も、休園をすることなく無事乗り切った。

エ. 広いグラウンドでの集団リズム運動、マラソン大会、運動会、縄跳び大会等を通して運動好きな子どもを育てるとともに、がんばりぬく強い心を育てた。

オ. 夏野菜(ミニトマト、ピーマン、ナス、キュウリ等)や米、イモ等を栽培し、収穫したものを給食で食べるなど食育の充実を図った。保護者からは「野菜をよく食べるようになった」との声がある。

カ. 食物アレルギーの配慮を要する園児に対して、きめ細かい指導等で保護者の信頼が得られるようになった。

(4) 家庭教育の充実及び地域の子育て支援センターの役割強化

- ①未就園児親子対象の「ちびっこクラブ」の充実
- ②「子育て講座」(名称を変更予定)の充実と参加者の拡大
- ③「親子で遊ぼう」(在園児対象)の活動内容の充実
- ④保護者・地域の声を生かした「開かれた幼稚園」づくり

(実績)

ア. 毎月実施の「ちびっこクラブ」(未就園児対象)には、月平均 75.7 人と多数の参加があったが、平成 24 年度(平均 84.7 人)と比べると下がっている。

イ. 入園式では、ちびっこクラブに参加したためか、泣かずに最後までがんばる子どもが多く、成果を発揮している。

ウ. 子育てセミナーは、年間 8 回実施したが、保護者には好評であり、1 回平均 45 人程度の参加を得た。

エ. 「親子で遊ぼう」は在園児対象の子育て支援事業であるが、毎年、内容を改善し、保護者の参加も多い。

オ. 園長だより(年間 31 号)を発行し、鹿児島幼稚園のよさの広報に努めた。楽しみにする保護者がみられた。

#### (5) 鹿児島国際大学の教育実習園としての役割・機能の強化

① 大学(児童学科)との連携・協同で幼児教育の充実・推進

② 実習内容の見直し・充実

③ 学生の保育体験やボランティアの受け入れ

(実績)

ア. 教育実習 2 年生(約 130 人)、本実習 4 年生(12 名)を実施した。

イ. 山木主任、田村教諭が鹿児島国際大学で学生を対象に出前講義を行った。2 人とも好評であった。

ウ. 預かり保育や夏祭り・運動会・発表会等でボランティア学生を受け入れ、職員の負担も軽減し、きめ細かい指導ができた。

なお、鹿児島高校の普通科の生徒から園児に卒園のプレゼントをいただいた。

#### (6) 幼・小・中学校や地域との連携

① 近隣幼・保・小・中との連携

② 地域(高齢者)や施設(特老)との交流

(実績)

ア. 複数の小学校と年 2 回、連絡会を開催した。本園の教諭は積極的に意見交換を行い、自ら資質向上に取り組んだ。

イ. 年中児が老人施設を訪問し、肩たたきや出し物発表等を行い、お年寄りが涙を流すなど感動的なふれあい活動が実施できた。

ウ. 運動会では、広いグラウンドにたくさんのテントをはり、地域の高齢者を招待した。

また、地域グラウンドゴルフ大会等の会場として開放し、喜んでいただいた。

## 2. 事務の効率化と環境整備

### (1) コンピュータの活用による円滑な事務の推進

① パソコン活用による園事務の効率化、適正な情報管理

② ホームページの刷新と活用

③ 情報の共有化と迅速な対応

(実績)

ア. 大学情報処理センターの協力により、定期的にホームページの内容を更新し

た。

イ. 携帯メールの活用により、保護者との連携が大変円滑に実施できた。

(2) 環境の整備・充実

①施設・遊具の安全点検の徹底

②グラウンドへ「屋根付きテント」の設置

③自作遊具の設置(グラウンド周囲)

(実績)

ア. 広いグラウンド、斜めになった土手等の草刈り等を計画的に行い、常に整然とした環境を整えることに努力した。

イ. 夏休み等を利用し、道路沿いのフェンス側の木の伐採を行い、すっきりした環境になった。

ウ. 満3歳児学級(つぼみ学級)の開設のため、黒板設置、掲示板設置等できる範囲のことを事務室全員で行い、予算節約に努めた。

エ. 大学から電話ボックスを譲っていただき、作り直して、石灰ライン引き入れの倉庫にした。

オ. 約4mほどの高さの雨樋に灰が大量にたまっていたが、作業を計画的に行い、灰の除去を行った。

以上 鹿児島幼稚園